

異常値の出るメカニズム 第8版

山田俊幸, 本田孝行, 小谷和彦(編)

杏林大教授・臨床検査医学

大西宏明

検査の異常値から病態を解き明かす
屈指の名著の最新版

本書は、多言を弄するまでもなく、わが国における検体検査分野の解説本として長きにわたり広く読み継がれている代表的な名著である。今版においても、初版から一貫する「異常値が出るメカニズムを学ぶことで、検査値と疾患への理解を深める」という編集方針は保ちながら、名著の名に胡坐することなく、貪欲に新たな挑戦が行われており、医師や臨床検査技師をめざす学生などの初学者から臨床検査の教育にあたる専門家まで、日常的に検体検査にかかわる者にとって必携の書となっている。

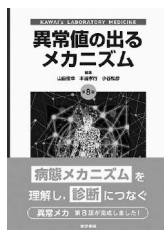
新規検査項目としては、血液学分野において近年日常的に検査されるようになった von Willebrand 因子、ADAMTS13 活性、HIT 抗体、トロンプモジュリンなど、生化学分野では新規検査項目が多く導入された肝線維化マーカー、そして遺伝子関連検査分野ではマルチプレックス PCR やマイクロサテライト不安定性検査などが新たに解説されている。また、最新の研究成果に基づく新たな知見も、さりげなく取り入れられているのがうれしい。

注目すべきは、基本的検査と二次的検査を分けていた前版のスタイルをあえて崩されたことだろう。例えば前版において甲状腺関連ホルモン以外のホルモン検査は基本検査に準ずる検査とされていたのはやや違和感があったが、これはおそらく「基本的検査と二次的検査」というスタイルの統一化が生み出したもので、今回の改訂ではそのような違和感は解消された。しかしこの改訂は、そのような形式的な意味での是非を超えた、本書のコンセプトにもかかわるものであるように思われる。本書がめざしているものは「検査値が異常となるメカニズムの解説」であり、検査値の異常を「病気のマーカー」として捉える見方とは大きく

異なるものである。「基本的検査」という言い方には、多分に「最初に行うスクリーニングの検査」という意味が含まれているが、それはあくまで診断を効率的に行うために慣習的に用いられる検査の順序であり、異常値の生じるメカニズムの本質と関係がない。例えば、検査の順序としては LD が基本的検査で LD アイソザイムは二次的検査かもしれないが、溶血で LD1 が上昇することは LD の上昇より二次的であることはまったくなく、むしろ LD1 の上昇が一次的である。

この、「異常値を生むメカニズム」を重視する方針は、本書の特長として随所に現れていると思われる。例えば、検査で重視される特異度・感度の情報がごく限られた項目にしか記載されていないが、これも、検査値を単なる「マーカー」として捉え、より特異度・感度が高くなる検査の組み合わせを探すといった見方を、本書は主題としていないことを示すものであると思われる。また、読者の理解を助けるためさらに充実された、視覚に訴える図表の数々、特に初版編者河合忠先生直伝の図の多くが、人体や臓器を含むものであることも、異常値を「マーカー」でなく、体や臓器とその異常が必然的に生み出している「現象」として捉えていることの表れであろう。

本書でより明解に記述されることとなった異常値を生むメカニズムについて、読者には十二分に堪能していただきたい。



●B5/頁 352/2024 年
定価：6,820 円
(本体 6,200 円＋税 10%)
[ISBN978-4-260-05385-3]
医学書院 刊